

岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室 公開指導 情報交換会 記録

平成30年11月5日

○ Aグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 中学生の進路について

- ・ 中3で来日したばかりの生徒の進路を考えるのが難しい。母国で勉強ができたといっても、日本では語句を覚え始めたばかりで到底追いつかない。
- ・ 在籍中学をあえてやめて、夜間中学に行く生徒がいる。そこでは充実した学校生活を送っているようで、また勉強もゆっくり進められる。

(2) バイリンガルについて

- ・ バイリンガルを育てるのはきっと簡単ではない。相当な本人の努力やサポートがいる。
 - ・ 生まれと育ちが日本で、両親がブラジル人の方の例。
 - 家庭では徹底的にポルトガル語を使う。日本語を話すと親に怒られる。日本の学校では日本語をしっかりと使う。
小4までは日本の学校が終わってから、ブラジル人学校に通っていた。友達と遊べなくてつらいときもあった。宿題も両方から出て大変。低学年時に取り出しによって在籍教室の授業の内容が途切れてしまうことが嫌で、取り出しを受けなくなった。
 - ・ 幼少期に来日した子どもたちが日本語を話せなかったり、低学年の漢字が書けなくなったりするのはなぜか。
 - 取り出し授業の内容をよく考える必要がある。ただ、字の写しなどをさせるだけではいけない。
- ### (3) 出身国による習慣の違いについて
- ・ 出身国によって習慣の違いがあるかもしれない。宿題をやるどころとやらないところがある。しかし、これは個人の特性か (?)

○ Bグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 外国人技能実習生受け入れボランティアについて (ベトナム, ミャンマー等)

- ・ 来日し、通訳、教師、介護士になるために1ヶ月間研修を行う。寮生活。携帯電話やネットの制限。ネットに依存しないため。
- ・ 来日するまでの母国での日本語指導。
- ・ 日本語教育を専攻していない教師が教えている。
- ・ 教える日本語レベルが低い。
- ・ ボランティアが教える。(資格なし)
- ・ 来日してからの日本語習得。
- ・ 30代以降でくる実習生は習得が遅い。
- ・ 10代でくる実習生は短期で覚える。

(2) 放課後に児童生徒の学習を支援するボランティアについて

- ・ 16:00~18:00まで、宿題のサポートや日本語を教える日本語教室がある。学校で行ったテストを持ってくるが、ルビ付きではないので児童生徒が困っている。ルビ付きであれば、答えられる問題もあるかもしれない。

(3) 生活相談窓口 (多文化ソーシャルワーカー) について

- ・ 愛知県国際交流協会では5人の多文化ソーシャルワーカーを設置。継続的、動向的支援ができるのは、多文化ソーシャルワーカーだけ。

○ Cグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 技能実習生への指導について

- ・ 「話す」「聞く」が指導の基本となっている。
- ・ 1クラス40名ほどであるが、日本での滞在年数や日本語学習期間などがまちまちであり、レベル差があるため何を指導するべきか難しい。
- ・ 他の教師と話す機会がない上に、自由に指導していいと言われ、どうしたら

良いかわからない。

- ・ 日本語が全くわからず、また英語など媒介語もない学習者への指導に困っている。ジェスチャーや絵を駆使して何とか伝えようとしているが、うまくいかない。

→ 「みんなの日本語」の文法解説版はほとんどの言語を網羅しているので、それをつかうのが良いかもしれない。

(2) 小学校での日本語指導ボランティアについて

- ・ 日本語が全くできない児童に、週1時間の取り出し指導を依頼された。しかし、期間は3か月しかなく、日本語が話せないままボランティアが終わってしまい悔いがある。各市町村で、外国人児童生徒への支援が全く違い、もどかしい思いがある。
- ・ ボランティアで取り出し指導をしているが、教員免許も持たない学生が、授業をわざわざ出してまで日本語指導をして良いのかと疑問に思っている。
- ・ 年齢によって指導方法を変えなければならないことが難しい。

(3) 日本人への多文化理解指導について

- ・ 外国人児童生徒がいない学校の子どもたちに、どうやって世界に目を向けてもらえば良いのか。

(4) 外国人生徒が、高校を中退しないための方策について

- ・ 高等学校でも、日本語教室を増やした方が良い。
- ・ 高等学校でアルバイトを始めると、学校の授業よりも楽しくてお金も手に入るという外国人側の問題もある。将来を見通して行動することを、中学校で教えなければならない。

○ Dグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 個別指導が必要な外国にルーツをもつ児童生徒の支援級などを考える上で、気をつけなければいけないことについて

- ・ 児童生徒の実態と生育歴をしっかりと把握する必要がある。学校に編入して来る前にどのような教育（集団での生活など）を受けてきたか。母語でのことばと文字が結びついているか。幼児期に（絵本の読み聞かせや声かけ等はあったかなど）保護者とどのように関わってきたか。実態を把握した上で、児童生徒にとって一番いい学習環境はどこなのかを検討し、支援級の入級を考えていかなくてはならない。
- ・ 児童相談所や医療機関で行っているアセスメント（WISC-IV）は日本人のためのものであるため、文化が異なる外国人児童生徒に通訳を交えて実施しても、あまり意味がない。
- ・ アセスメントでその児童生徒が支援級対象であるかと考えるのではなく、支援級での個別の指導を通して、在籍学級にもどしていくためには、どうしていかなくてはならないかと考え、アプローチをかけていくことが重要。
- ・ まずは、基本的なコミュニケーションをとれるように支援をしていく必要がある。
- ・ 学習だけでなく、学校行事などを活用しながら、潜在的な能力を引き上げていくアプローチも大変有効である。

(2) 大学進学や社会の中で活躍している外国人について

- ・ 日本の小中学校で教育を受けた外国人の中で、大学に進学、卒業して社会の中で活躍している人が年々増加している。
- ・ 愛教大を卒業し、教員採用試験に合格。教員として活躍している方もいる。

○ Eグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 母語指導の必要性について

- ・ 母語指導を行って、母語能力の向上など大きな変化は見られなくても、子どもたちにルーツを感じさせる機会になっている。外国人であることを隠していた子どもでも、ルーツに自信をもち大切にできるようになったと思われる。

(2) 支援のあり方について

- ・ 月に1回の巡回指導であるため、継続的な支援が行えない。また、月の計画

書はあっても、当日になって変更があり準備ができず、適当な支援を行えないこともある。指導員が本当に必要なのか、必要ならば目的や支援のあり方を明確にしてほしい。

(3) 日本生まれの外国にルーツをもつ子どもたちの支援について

- ・ 日本語での日常会話には困らない子どもたちの思考力を高めるのが難しい。
- 部活を頑張らせるなど友人間の繋がりを強くすることで、日常会話を通してテストや進路について日本人と同じような感覚をもたせることができる。日本語での環境と友人関係が日本語の伸びに大きく影響していると思われる。

○ Fグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 各校で抱える課題について

- ・ 初期指導からもどった子への指導法を教えてほしい。
- ・ 中国人、フィリピン人とで苦手分野が違う。中国人は数英が得意だが、フィリピン人は数学が苦手。フィリピンの子どもがあまり会話をしようとしないので困っている。

(2) 各校の支援体制について

- ・ 特別支援コーディネーターがいる。日本語教育適応教室で教科の補充を行っている。
- ・ 大阪市では、中学校市内5校にセンター校がある。週2回2時間午前と午後でそれ以外の時は、在籍学校で授業をうける。1年～1年3ヶ月くらい教科指導はせず、日本語指導に特化して指導をしている。テストを受けて、合格したら終了。20名を2名で教えている。多い学校は加配教員が教える。連絡帳を担当の先生と共有し、情報を伝えている。
- ・ 2ヶ月160時間で初期指導をする。

(3) 送迎の方法について

- ・ NPO法人が学校まで迎えに来て家まで送ることもある。
- ・ 公共交通機関を利用して自分でセンター校まで登校している。

(4) 進路指導について

- ・ 高校特別入試枠がある。公立学校8校に10～15名入れる。限りがあるので入ることが難しい。英数母語での作文のみで受験できる。特別枠の高校には母語の先生が来てくれる。

○ Gグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 指導者の不足について

- ・ 外国にルーツをもつ児童生徒が増加しているが、散在地域のため日本語教育適応学級担当教員の加配がとれず、指導者が不足している。
- ・ 校外で放課後支援を行っていたボランティア団体に働きかけ、取り出し指導のサポートをしてくださっている。
- ・ 校外で活動している地域のNPOやボランティアとの連携が重要。

(2) 国際理解について

- ・ 以前は「母語教室」という形で、放課後にボランティアで母語を外国人の子どもに教えていた。現在は、「ポルトガル語教室」「中国語教室」という形で、日本人も来られる教室にして、国際理解の場となっている。

(3) 指導内容について

- ・ 教科に関しては、指導時間も限られており、すべてを教えできるようになることは難しいため、指導内容を精選したり、重点や目標を定めることが必要。
- ・ 最低限、漢字の読みと算数の計算はできるよう重点を絞って指導している。

(4) 保護者の支援について

- ・ 出稼ぎを目的として来日している保護者がほとんど。学校行事参加が難しかったり、転出入の激しい地域ではコミュニティの形成も難しく、孤立してしまう家庭が多い。保護者を支援することが児童生徒の支援につながる。

○ Hグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 日本語教室でのクラス分けについて

- ・ ひらがなの読み書きなど学校生活に関する基本的な内容を中心とした「ホップ」、教科の学習に関する基本的な内容を中心とした「ステップ」、そして、在籍学級の3つに分けることで、個々に合わせた指導を目指している。
- (2) 指導に適した教材について
 - ・ 現学年以前の教科書や「日本語学級」などの教科書以外の教材を用いる。
- (3) 日本語指導での悩みについて
 - ・ ことばの問題で困り感があるのか、特別支援の指導が必要なのかの判断が難しい。
 - ・ 日本人の保護者から「外国人児童に対する支援が手厚すぎないか」という声が上がっている。
 - ・ 非常勤講師の場合、担任との情報交換が難しく、勤務時間外に担任やその他の担当者へ連絡しなければならない。
 - ・ 在籍学級の学習についていけないという点だけを見て、日本語指導を理解してくれない担任もいる。
- (4) 初期指導での悩みについて
 - ・ 初期指導教室については、他校へ行かせてまで学習させる必要はない、という保護者もあり、初期指導を受けさせない場合もある。
 - ・ 教科指導まで十分に手が回らない。
 - ・ 各国語の翻訳文書の作成で、教材研究をする時間がなくなってしまう。
 - ・ 児童によって実態が非常に異なるので、評価基準が難しい。
 - ・ 「日本語学級」などの教材だけでは、在籍学級の学習へは追いつけない。
 - ・ 高学年で来日した児童については、1年生の教科書を使って指導にあたるが、在籍学級の学習へ移行するタイミングが難しい。
 - ・ リライト文にしようとしても個々のレベルが違うので、教材が選びづらい。
- 授業時間外で、事前に学習する内容のリライト文や絵本を借りてきて、授業のはじめに数分間、音読・朗読をしてから授業の内容に入るなどの支援をしている。
- ・ 日本語と母国語の両方でのコミュニケーションが上手にとれない児童への支援が難しい。
- 写真、イラスト、具体物などを使い、視覚的に捉えやすくしている。
- ・ 在籍学級で使用している単元毎のテストなどで点数がとれていないため、担任が日本語指導を理解してくれない。
- 国語や算数の文章問題は、自力で読もうとしても理解できないが、教員が読み上げることで理解することができる児童も多く見てきた。読み上げるという支援をして評価をとる、ということも視野に入れて担任と連携することも大切。

○ Iグループ『同じような立場の方との情報交換』

- (1) 時間割の組み方について
 - ・ 国語中心（算数も含む）で取り出しをしているが、取り出し可能教科が限られるため、時間割を組むのが難しい。児童に必要な時間数を取り出すことができない。
 - ・ 国語・算数については、全時間取り出し、或いは、取り出しなしのどちらかのため、よい面・悪い面の両面がある。また、全時間取り出しの児童の場合、児童は在籍学級では国語・算数の授業は全く受けないため、これでいいのかという疑問も抱えている。
- (2) 指導内容について
 - ・ 限られた指導時間内で、児童に必要な個別の指導と在籍学級での学習内容の指導とのバランスをとるのが難しい。
- (3) 中学校の進路指導につながる小学校における指導
 - ・ 中学校になってドロップアウトしないように、小学校のうちにやっておくべき指導

○ Jグループ『同じような立場の方との情報交換』

- (1) 学校での日本語使用のルールについて

- ・ 外国人児童が多いため、学校内での使用言語をルール化している。(学校の門をくぐったら、日本語しか使わない) そうしないと各言語が学校中で飛び交い、コミュニケーションが取れないため。しかし、家では母語を必ず使うように指導している。
- (2) 教科指導について
- ・ 日本語指導に重点を置いている学校と、教科指導に重点を置いている学校と、学校間での違いがあった。また、今回の公開指導で教科指導の重要性を感じたという意見もあった。しかし、来日1ヶ月程度であっても、それぞれの学年の教科指導を迫られる場合には、子どもたちの理解も限られるため指導に困っている。
- (3) 学校内に多国籍の児童がいるケースについて
- ・ 外国人とひとくくりにしても、中南米のスペイン系、ブラジル系、アジア系でグループのようなものができ、学校内で複数のグループができてしまっている。
- (4) 外国人の保護者の意識について
- ・ 子どもに通訳をさせる親の問題。両親だけでなく、親族、友達の通訳のために簡単に学校を休ませてしまったり、通訳をするために子どもが親や家庭の状況を知ってしまい板挟みの状況になっている。

○ Kグループ『同じような立場の方との情報交換』

- (1) 教科指導について
- ・ 最近の日本語指導は日本語だけを指導するというよりも、教科書で教科指導をしながら、日本語の学習も取り入れるという形で行っている。しかし、教科書にルビをふって音読をしたり、教科書の絵を見せたりしながら言葉を教えても、肝心の内容が理解できていない。教科書の絵だけではなく、そのものの写真や絵をたくさん見せて、理解させていく必要がある。
 - ・ 光村図書出版の教科書の指導書に付属しているCD-ROMには、ルビのついた本文のデータがあるので、印刷してすぐに活用できる。
 - ・ 教科書の内容を母語で簡単に説明すると、児童生徒もイメージをもちながら学習できるので良い。内容は違うが、「多言語絵本の会RAINBOW」では、日本の絵本を多言語で翻訳しており、日本語の力がなくても、その内容がわかるようになっている。Youtubeでは音声付のものを配信しているので、ぜひ見てほしい。
 - ・ どの学年でも、同じ表現、同じ言い回しで継続的に指導したいので、くもんのドリルを使って指導をしている。
- (2) 岩倉市日本語・ポルトガル語適応指導教室について
- ・ 4年目までは担当者は1人だった。
 - ・ 本適応教室開設時から教材をPCで作成し、その教材を蓄積してきている。
 - ・ 教材は、「一太郎でプリント作成→提示用に変換→画像処理をする。」の順序で作成すると、1度に3つの教材が出来上がり効率がいい。基本的にジャストシステムで作成している。ジャストシステムはどの学校にもだいたいある。しかし、今後は、ワードやエクセルに変わってくるので注意。

○ Lグループ『同じような立場の方との情報交換』

- (1) 適応指導を終了した子どもたちの指導について
- ・ トゥカーノ等、母語付きの学習教材を積極的に活用する。
 - ・ 漢字は小3止まりになることが多いため、繰り返し指導していきたい。
 - ・ 教科書のリライトを使った読解や、「ことばのテーブル」を活用して語彙を増やしていく。
 - ・ 小学生の内に最低限押さえておきたいところは、保護者にも訴えることで、家庭での協力を仰ぐ。
 - ・ 担任の先生と連携を取って、一緒に考えていく。
- (2) 子どもたちの指導における今後の課題について
- ・ 母国の学習態度がよく表れている。

- ・ 特別な支援が必要な児童生徒が増えているため、別教室で個別に対応できるよう対策を考えていきたい。

○ Mグループ『同じような立場の方との情報交換』

(1) 外国にルーツのある児童生徒が母語ができる教師に頼ることについて

- ・ ブラジルにルーツがある児童生徒は、ポルトガル語ができる先生に小さいことですぐに頼ってしまい、日本語で話そうとしない。日頃から「日本語で話して。」と言い続けることで、少しずつ自分の力で解決する力を育てようとしている。
- ・ ジレンマもあり、日頃から教師に頼り過ぎないように日本語で話すよう指導しているが、叱る時はなぜ叱られているかが理解できるよう、ポルトガル語で叱っている。授業中は基本的に日本語、休み時間はリラックスできるようにポルトガル語を話してもいいと伝えている。
- ・ 算数は初めにしっかりと理解できないと困るため、ポルトガル語で解き方を指導し、少しずつ解けるようになってきたら、日本語の単語だけで示し、少しずつ日本語を増やすといった形で授業をしている。

(2) 日本語ゼロの児童生徒に対する指導について

- ・ 教師が子どもの母語が話せる場合には、最初は母語も使って接し、少しずつ減らすようにしている。いずれは日本語だけで生活ができるように、子どもの様子を見て、子どもが母語で話していても日本語で返事をするなどしている。

○ 1グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

(1) 日本語能力試験の受験について

- ・ 動機付けとしてはよい。
- ・ 中学校では、今後の進路に向けた証明になる。
- ・ 高い試験料を支払っても、それ以上に子どもたちの達成感につながるような価値があれば受けることはよいこと。
- ・ 誰にでもやればよいというわけではない。
- ・ 日本語の初期段階では、身近な目標をこなし、十分に力をつけてから受験するとよい。

(2) 指導法について。

- ・ 漢字の指導や「ことばのテーブル」の活用が有効である。
- ・ 日本語能力試験の過去問や問題集を使って、解答のパターンを教えるとよい。
- ・ 当日の2週間前から毎日、休み時間等を使って、数問ずつ問題集を使って、リスニングのトレーニングをすることで慣れさせる。

○ 2グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

(1) 中学生を対象とした初期指導について

- ・ 生徒によっては、小学校が1週間ほどで学習する内容を2日間ほどにまとめて指導することがある。
- ・ 行事等には参加させないで、初期指導に集中するようにしている。月曜日から木曜日まで初期指導教室で指導を受けて、金曜日のみ在籍校で生活するようにさせている。在籍学級の生徒と給食を食べて、日本の学校のルールを徐々に学習できるようにしている。また、金曜日は初期指導担当者は、指導している生徒が在籍している学校を巡回して、授業と一緒に入ったり、生徒の緊張がほぐれるよう支援している。
- ・ 数学などは、小学校6年までの学習を指導して、在籍学級の学習についていけるよう支援している。また、小学校の内容が定着していない生徒も多いので丁寧に指導するようにしている。
- ・ ソフトランディングとして、いきなり在籍学級に入るなどしてショックを受けないように配慮している。
- ・ 在籍学級では黙っていても、初期指導では活発に発言したり、母語では生き生きと話すことができたりするなど、学校生活では見ることのできない生徒の実態などを伝えるためにも、週末に担任の先生との情報共有を行っている。

○ 3グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

- (1) 経済的・時間的余裕がなく、協力が得られない家庭の児童及び、学校生活になじめず、在籍学級に居場所がない児童への支援について
 - ・ 取り出す時間数にも限りがあるため、対応にも限りがある。
 - ・ 周りの日本人児童・生徒を巻き込んでいくことが大切。
 - ・ 担任との連携が大切。
 - ・ 全て大人が支援するのではなく、大人が子どもをつないであげることも必要。
- (2) 担任からの理解・協力を得る方法について
 - ・ 日本語教室担当の教員という立場のみではなく、日頃からできることをするというスタンスで、日本人・外国人という括りなく全体に積極的に関わり、フォローするというスタンスで取り組んでいくことも必要ではないか。
 - ・ 理解してもらうための説明や取組を地道に続けていくことが必要ではないか。時間はかかる。
- (3) 体制づくりについて
 - ・ 入れ替わりがあり、長期的な視野に立っての取組が難しい。中心になり、長くやっていく人が必要。
 - ・ 人件費等が関わってくるので、上の立場の人を味方につけることが必要。

○ 4グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

- (1) 外国にルーツをもつ生徒の進路について
 - ・ 日本語指導が必要な外国人中学生の進路状況は、愛知県内の公立中学校（名古屋市以外）を卒業した外国人生徒のうち、日本語指導が必要な生徒530人を対象に調査した結果、約70%が高等学校に進学している。【愛知県交際交流協会のデータより】
 - ・ 全日制高，定時制高，通信制高，高等専門学校，特別支援学校，専修学校などを合わせると83.3%の生徒が上級学校に進学している。
- (2) 進学を考える際の学力の目安について
 - ・ 定時制高に進学できるくらいの学力を身につけさせたいと考え、指導にあたっている。
- (3) 外国人保護者の学校行事やPTA活動などへの参加のあり方について
 - ・ 日本人の保護者と外国人の保護者の両方にPTAの役員をやってもらっている。言語の壁は、日本語が上手な外国人保護者に通訳をしてもらいながら、進めている。外国人保護者も積極的にPTAの活動や学校行事に参加してくれるようになってきた。
- (4) 外国にルーツをもつ児童生徒が学校内で活躍するための支援
 - ・ 部活動に積極的に参加するよう、小学校のころから声をかけるといいのではないかと。特に運動部。スポーツを通し、日本人生徒との関わりも増え、会話力も上がる。勉強は苦手だが、部活動などで活躍できると、学校生活にも意欲的になる。
 - ・ 国際交流会のような学校行事を開催する。外国にルーツをもつ児童生徒が母国について発表することで、日本人児童生徒の国際理解を深めることができるし、外国にルーツをもつ児童生徒にとってはアイデンティティの保持につながる。
- (5) 外国にルーツをもつ児童生徒と日本人児童生徒の関わりについて
 - ・ 低学年に来日した児童ほど、国籍の壁などなく、仲良く関わっている。
 - ・ 国籍を気にしているのは、大人だけ。子どもたちは国籍など関係なく、学校の仲間として過ごしている。
 - ・ 外国にルーツをもつ児童生徒が増え、外国人ばかりで固まり、日本語の会話力が上がらない。
 - ・ コミュニケーションが簡単にとれるから、同じ国籍同士で固まる。日本語を使わなくても、生活ができてしまう環境にも問題がある。
 - ・ コミュニケーションをとるために必要な言語能力も指導していく必要がある。
 - ・ あきらめずに何度も何度も声かけをし、学校生活の中では日本語で会話する

ことの大切さを訴えている。

○ 5グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

(1) いろいろな立場の方の紹介、悩みなど

- ・ 稲沢市の学校では、教科書を使って指導をしている。一太郎だと振り仮名を一発でふることができるので、教科書の本文を打ち込んで、ルビつきのものを活用している。
- ・ 名古屋YWCAガリ勉クラブでは、様々な言語・学年・地域の児童生徒が集まり、対応をしている。一年中、家にいたような子も、今はガリ勉クラブに通って、勉強を続けている。
- ・ 福井県の学校では、全国学力調査テストの結果を重視するところがあり、外国にルーツをもつ児童生徒には苦しい状況である。小中の連携も取れていないので課題である。
- ・ 半田市の学校では、困っていることが4点ある。①初期指導を各学校でやらなくてはならない。子どもの母語を話せる教師がいらないのも課題。②人材不足である。③教材の一貫性がないので、教材の整備から始めなくてはならない。④中学校に日本語教室がない。
- ・ 津島市の学校では、小中の連携が取れておらず、小学校から中学校に進学すると、何も対応してくれなくなる学校がある。岩倉市の日本語教室のノウハウを津島市でも取り入れたいが、理解を得られず難しい。産業界は、外国人労働者の確保のため、子どもを無理やり進学させようとしてくるところがあり、その犠牲になっている子どもが不憫である。
- ・ 名古屋市でポルトガル語の指導をしている。日本語がわからない児童生徒が、教室でお客様状態になっているのにも関わらず、対応していないことがあり、何とかしてあげたいと考えている。

○ 6グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

(1) 日本語で発話できない児童生徒について

- ・ 語彙は理解できているが、日本語で発話できない児童生徒がいる。
- ・ ある程度日本語を覚えると、突然、堰を切ったように発話しだす例が多くある。
- ・ 学級でなかなか発話できない児童に、「クラスの子にインタビューしよう」という宿題を出したことがある。
- ・ 音読や話型を繰り返し練習すると効果的。
- ・ 日本語を話さざるを得ない状況で、日本語が上達する。特に、部活動や遊び等の活動を交えた中での会話が非常に効果的。

(2) 母語で会話する児童生徒への対応について

- ・ 授業時間中は母語での会話を禁止しているが、休み時間は禁止していない。心の安らぎや解放する時間も必要。

(3) 進学、キャリア教育について

- ・ 義務教育期間中に来日し、教員、弁護士等の職に就いた例がある。こうした例を児童生徒に示すことで目標をもって学習に取り組むことができる。
- ・ 児童生徒だけではなく、保護者に対しても早い段階で進学に必要な資金等の説明をしておく必要がある。生徒に力があっても、金銭面の問題から進学できなかったり、退学してしまったりする例は少なくない。

○ 7グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

(1) 多言語での翻訳文書作成について

- ・ 多言語での情報発信が日本語での情報発信に追いつけない。
- ・ 文部科学省の情報検索サイト「かすたねっと」から、既存の翻訳文書を探す。
- ・ 全く同じ文面でなくても、重要なポイントが押さえてあればそれを使えば良い。
- ・ 翻訳を依頼されたときも、全部を翻訳するのではなく、大事なポイントに絞って依頼をかけるようお願いをする。

- ・ せっかく翻訳文書を作っても見ない保護者が多い。
 - ・ 大切な部分が一目でわかるよう、目のイラストを付けるなど工夫する。
- (2) 授業中の教員の母語使用について
- ・ 授業中に教員が必要に応じて母語を使っていたら、子どもが母語でばかり話しかけるようになってしまった。
 - ・ 子どもが母語で話してしまうのは、無意識的なこと。母語で話しかけられても、日本語で話すよう指示する。日本語での言い方がわからなかったら、それを教えた後、繰り返させるなどして、何回も指導して意識を徹底させる。
 - ・ 母語指導は大切だが、日本語指導に求められる最終目標は日本語で、勉強する力を身につけさせることであり、日本語教員としての視点を忘れてはいけない。
 - ・ 母語で話したら、イエローカードを出すなど、ゲーム感覚でもいいから、教室としてのルールを徹底化させる。

○ 8グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

- (1) 日本語レベルが異なる児童・生徒と一緒に指導する場合について
- ・ 時間割の関係でどうしてもそうなることがある。
 - ・ 授業の中で別々の課題を与えると良いのではないか。
たとえば、中級には辞書などを使って調べ学習をし、初級にはなぞり書きのプリントに取り組むなど。しかし、どちらもプリント中心になりがち。
 - ・ 児童・生徒が自主的に質問するまで待つことが大切。「わからない」と自分から言えるように。
- (2) 担任との連携について
- ・ 担任をつかまえるのが一苦労。つかまえてもまともに話を聞いてもらえないことがある。
 - ・ 日本語担当は基本的に1人か数名配置が多い。
 - ・ 担任等の外国にルーツをもつ児童・生徒への扱いが比較的に手薄になっているのではないか。
 - ・ 指導者の国際理解が遅れているところがまだ多く見られる。
 - ・ 同じ校区や近い地域で情報交換ができると良い。
 - ・ 学校に残って教材を作っているとき孤独を感じる。
- (3) 配付教材について
- ・ 学校が配付した日と同日に、翻訳文書を配付することを大切にしている学校がある。しかし、そうすると、担任の先生等に早く作成してもらうことになり難しい。

○ 9グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

- (1) 担任との連携について
- ・ 現学級で何を学習しているか、積極的に担任の先生に聞いて確認をしている。
 - ・ クラスでやるべき課題プリント等を事前にもらっておき、現学級でもできるだけ活躍できるように気を配っている。
 - ・ 巡回で回る学校であっても、授業前に少し担任と話することで情報共有をしている。
- (2) 外国にルーツのある保護者がPTAに参加することについて
- ・ 1番の問題は日本語。日本語がわからないために不安を感じ、なかなか学校での活動に入っていけない保護者が多い。
 - ・ 入学説明会の際に、PTAの方がどんな活動をしているのかを説明し、不安を取り除くようにしている。
 - ・ 学級委員の人数を工夫し、日本人2人、外国人2人とするすることで、PTAの活動に不安なく参加できるようにしている。

○ 10グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

- (1) 指導内容について
- ・ 教師の数が足りず、様々なレベルの子を同じ時間に指導することが多い。そ

のため、どちらかに合わせると課題についてこれなかったり簡単すぎて飽きてしまったり、どちらも集中して取り組むためにはそのような課題を与えてあげるとよい。

- ・ 東小学校の授業を見て、自分のクラスで授業を受けているような児童を、自分たちの市では取り出しをしているのだと知った。それなりに日本語ができる生徒に対しては、何を教えていくとよいのか考えながら指導している。

(2) 支援体制について

- ・ 担当者が自分一人なので、保護者への対応が大変。定期的に担当者会で情報を共有したり、研修会でスキルアップしたりできる環境がうらやましい。

(3) 指導教材について

- ・ 岩倉市の使用している教材は児童生徒にとってわかりやすく作られていて興味深いものであった。北九州市や大分市の教材、東京外国語大学の計算問題をよく使わせてもらっている。

(4) 保護者について

- ・ 欠席連絡をせずに学校を休むことがある。こちらから電話をしてもつながらないことが多く、担任が夕方家まで様子を見に行っている。休む場合は、何とか学校へ連絡してもらうように声をかけてはいるが、なかなか伝わらず困っている。

○ 11グループ『いろいろな立場の方との情報交換』

(1) 各校の支援体制について

- ・ 3つの指導形式がある。(大阪市)
 - ① 加配教員による指導 (外国籍生徒の割合が多い学校)
 - ② 派遣による指導 (低学年の初期指導を全25回で行う)
 - ③ 市内10校のセンター校で指導 (電車に乗ってくるため、安全面が課題)

(2) 組織について

- ・ 日本語担当の研修が年に2回あるが、外部講師による研修なので、担当者が教材を共有したり、情報を交換したりすることは少ない。
- ・ クラスの半数以上が外国人なので、日本語担当者の人数は多いが、戦力をうまく使えていない。先生の入替わりが多いので、指導や組織的なものが積み上がっていかない。
- ・ 行政の方で日本語指導を専門にする教員を増やしてほしい。教員に、日本語担当者枠をきちんとつくる。担任を経験してから日本語担当になることで、経験が活かせる視野を広げることができる。教員になってから選択肢として、日本語担当を選べるというようにしてはどうか。

(3) 不登校の児童生徒について

- ・ 日常会話は問題ない子でも、中学生になると、学力の面で周囲と明らかな差がみえてくる。勉強や言語、性格など様々な問題が絡んで不登校になってしまう。
- ・ 在籍校には通えないが、日本語を勉強するセンター校や日本語教室には通える子どもはいる。
- ・ 英語や中国語でカウンセリングできる人はいる。その子の思いを母語で聞いてくれる支援者がいるとよい。

○ 全体会

(1) 入管法の改正に対する今後の岩倉市の体制(取組)について

- ・ 現場から声をあげて上へ届けていく。例えば、岩倉は公開指導を行って、地域の人に困っている姿を見てもらい、協力を求めていった。地道に声を上げていくことを繰り返しやっていくことで、県や国が動いていくと思う。どの学校も準備や心構えをしていく必要がある。